

アスタリスクin黒剣
番外編六花にいる錬鉄
のシェフ達の日常

異次元の若林源三

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

学戦都市アスタリスクin黒の剣士に出てきたエミヤが働くカフェの小話。
投稿なんてまちまち気分が乗ったら書く程度。

目次

食べ過ぎ！騎士王！

1

食べ過ぎ！騎士王！

アスタリスクに出店されているカフェ《アーネンエルベ》。そこには様々な風貌の従業員がいます。

ここに来店する人も様々。

さて今日はどんな人が来店するのでしょうか？

エミヤ「ふう……朝の仕込みはこれくらいでいいか」

ここアーネンエルベの従業員の朝は早い……という訳ではないが、今日は何もないので早めの出勤で時間があったので、準備に取りかかった。

しかし先日はまさか《戦律の魔女》からレシピを聞かれるとはな……自分の料理の腕が認められたということなのだろう。それで慢心するつもりは毛頭ないが。

エミヤ「しかしいささか早く来すぎたか？」

すると従業員専用の扉が開く。

「あ、衛宮くん今日は早いね」

エミヤ「む、ブーディカか。今日は鍛練もない上に早く起きてしまったな」

ブディカ「そうなんだ。じゃあ仕込みももう終わってるの?」

エミヤ「うむ」

ブディカ「ありがとう。今日は少し早めに開店出来るね」

ブディカも従業員の服装に着替える。

クー・フリーンや玉藻音狐も出勤する。

クー「おう、準備終わってるか?」

エミヤ「ああ、後は客が来るのを待つだけだ」

音狐「お疲れなのだ。今日は誰が来るのだろうか」

クー「いつも通り、昼頃に《騎士王》の嬢ちゃんが衛宮の飯目当てで来るだろ」

ブディカ「そしてその取り巻きの《円卓》が来るまでがセットだよ」

扉の『close』を裏返し『open』にし客を待つ。

カランカラン♪

クー「いらっしやい〜」

「コーヒーとフレンチトーストを頼む」

早速客が来た。

さて《調理・開始》!

時刻は12時を少し過ぎた頃。

調理場の雰囲気はとても緊迫していた。理由は……

カランカラン♪

クー「いらつしやい〜」

入店してきたのは輝く金髪を後ろで団子にまとめアホ毛が生えた、女性だった。

調理場が緊迫していたのは彼女が原因だったのだ……

「一名です。料理長の大盛セット『五種』お願いします」

クー「畏まりました」

オレは包丁を猛スピードで振るい、野菜をみじん切りにして、肉も切って行く。

オレは料理に妥協は一切しない。

フライパンに油を引き、肉を焼く。焦げないようにしっかりと見る。

米も業務用の炊飯器何個かに『アルトリア専用』と張り紙されているのでそこから消費する。

皿には特大オムライス、特盛ステーキ、特盛ポテトサラダがよそわれる。

エミヤ「クー・フリーン頼む」

クー「あいよ！」

オレは再び別の料理に取りかかる。次は特盛うな重、その次は特盛海鮮丼とカフェに

無いようなものを作る。

といつてもこれ全てアルトリア専用なのだ……

元々彼女がここの常連客でオレがバイトしている頃に王竜星武祭を優勝してメニユー(彼女専用)を追加したのが事の始まりだった。

オレが星空猟警備隊を退職、ここに就職したことを知るや、再びここに戻って来たとか。(クー・フリーリン曰く)

それはそれで嬉しいのだが、あまりにも食い過ぎである。

幸いなのが彼女の来る曜日が決まっていることだ。

そして彼女が食べている間に《円卓》が入店する。

金髪、紫髪、赤髪ロングの三人組。

クー「いらっしやい〜」

ガウエ「三名で紅茶とパンケーキ」

ランス「私も紅茶でワッフルを」

トリ「私もガウエインと同じものを」

今回は円卓三人だった。ベディヴィエールはガロードワースで仕事らしい。

アルトリア&mp; ;円卓が会計を済ませ、店を出た途端全員息を吐いた。

クー「本当食い過ぎだろあの騎士王の嬢ちゃん」

ブディカ「ホント……底なしよね……それで太らないとか反則でしょ」

音狐「キヤツトもこればかりは疲れたのだ……」

エミヤ「うむ……休憩時間を取るか」

「「賛成……」」

そして閉店時間になる。

ブディカ「みんなお疲れ様〜」

エミヤ「閉店時間だ……」

クー「んじや俺は先帰る」

音狐「キヤツトも帰るのだな。ではまたTomorrowだ」

私も着替えて、帰宅する。今日はセール品とかもなく。ゆっくり帰れる。

さて明日はどんな客が来るのだろうか。